

なごや生物多様性センター10周年

生きもののシンフォニー



いのちがやくなごや



令和4年3月 36号

なごや生物多様性センター・なごや生物多様性保全活動協議会

特集

設立10周年記念 オンラインシンポジウム開催！

COP10翌年の2011年、身近な自然の保全再生に向けた市民（団体）・専門家・行政等による協働の推進拠点として設立されたセンターと協議会。

令和4年1月22日（土）、設立10周年を記念したオンラインシンポジウムを開催しました。有識者による基調講演・提言のほか、協議会や高校生の皆さんとの座談会を通して、これまでの取り組みを振り返りながら、10年後の目指すべき姿を語り合いました。



CONTENTS

特集

なごや生物多様性センター・なごや生物多様性保全活動協議会

設立10周年記念 オンラインシンポジウム開催！ P1～4

なごや生きものの報告会を開催します P3

10周年記念誌を発行しました P3

TOPICS 標本室を整備しました！ P5

すり鉢池で池干しを実施しました P6

掲 示 板 機関誌「なごやの生物多様性」第9巻を発行しました P6

14

海の豊かさを
守ろう



15

陸の豊かさも
守ろう



17

パートナーシップで
目標を達成しよう



設立10周年記念オンラインシンポジウム

なごやの生物多様性 ～2030年に向けて～

第1部 基調講演『ワンヘルス ～生物多様性保全と感染症管理～』

第1部では、人と動物、生態系の健康を一体のものとして考える「ワンヘルス」をテーマに、安心・安全で豊かな社会を維持していくための自然との共生のあり方について考えました。

五箇 公一さん
国立環境研究所
生物多様性領域 室長



なぜ生物多様性が大切な

生物多様性とは、遺伝子から種、生態系、景観に至るまで生きものが織りなす多様な世界のこと。人間は水や食料を始めとして生物多様性が生み出す様々な生態系サービス享受着暮らしています。つまり、生物多様性は人間が生きていくために必要な環境基盤で、「生物多様性を保全することは、エコではなく人間が生き残るためのエゴだと言うこともできる」と五箇さん。

そんな生物多様性が今、急速に劣化しています。要因は、生息地の破壊や乱獲、外来種の侵入、環境汚染、気候変動など、いずれも人間の活動と深く関わっています。身近な問題として、家庭から出る生活排水やプラスチックごみなど、便利で快適な日常生活も、実は環境を痛めつけているとして、五箇さんは「足元から生活を見直すことが必要」と語りかけました。

自然共生社会をめざして

感染症については、両生類を襲うカエルツボカビが世界中へ拡散したことを例に、野生生物と共生していたウイルスが生息地から持ち出されたり、人間が彼らの生息地へと踏み込んだりすることで感染症が起こると解説。新型コロナウイルスなどの感染症も、自然破壊などにより野生生物との距離が接近したことで人への感染が起き、移動のグローバル化によって感染が急速に拡大したと指摘されました。

はるか昔から、ウイルスは自然界の中で生態系のバランスを維持するという役割を担ってきました。人間の活動

による生態系の破壊と、その結果としての感染症の拡大、これは自然界からのしっぺ返しかもしれません。私たちは今回の新型コロナによって、自然との関わり方を改めて考えさせられることになりました。

その上で「これから目指すべきは自然共生社会の構築」と五箇さん。まずは人間社会が野生生物の生息域を侵食することがないように棲み分けていくことが大切で、そのためにも、資源搾取型のグローバリゼーションから脱却し、地産地消により資源やエネルギーが地域レベルで循環する地方分散型自立国家を目指すべきだと力説されました。そして、画一的なグローバリゼーションの対極として地域や社会、国同士が固有性を発揮し、バランスをとりながら繋がっていくことで世界全体が持続する、これこそがワンヘルスの根幹だと仰って講演を締めくくりました。

かつて日本が、里山を中心とした自然共生・循環型社会を形成していたことを思い起こし、改めて世の中の仕組みから考えてみる必要があると感じさせられました。

※講演の様子はなごや生きものライブラリーで視聴いただけます（URLは最終面参照）。



第2部 提言『愛知なごやから考える生物多様性のこれからの10年』

第2部では、「愛知なごやから考える生物多様性のこれからの10年」をテーマに、国内外の生物多様性保全の取り組み事例と照らし合わせながら、なごやの可能性を探りました。

香坂 玲さん

名古屋大学大学院
環境学研究科 教授



愛知なごやは、愛知万博からCOP10、ESD（持続可能な開発のための教育）、SDGsといった流れで、生物多様性保全への取り組みが脈々と続いています。

COP10では、2050年の自然共生社会の実現に向けて、2020年までに世界で取り組むべき「愛知目標」が採択。愛知県内でも市民団体から行政まで様々な取り組みが行われてきました。今年がCOP15の開催年で2030年までの世界目標を議論。日本でも生物多様性国家戦略が改定されようとしています。

その中で「今後、重要な役割を果たすのは、民間の取り組みと連携した自然環境保全（OECMs）」と香坂さん。例えば、保護区以外の企業保有の森林や敷地内の緑地などを有効活用し生物多様性を保全する手法で、県内では知多半島や熱田区の企業などが実施。所有地にビオトープを設け、生態系保全や市民の環境学習などに取り組んでいます。また、都市化で心配される自然災害に対して、生態系を生かしたグリーンインフラが防災・減災に役立つことを指摘。自然環境が持つ多様な機能が持続可能な地域づくりに繋がっていきます。

次に着目したのは流域圏の連携。EUの有機農業を例に生産から流通・消費までが持続可能なシステムとなっており、環境に配慮する農家への支援やスーパーでの

製品の取り扱い、学校給食への提供などがうまく繋がっていることを紹介。名古屋でも、栄のオアシス21で地元の農家が生産した野菜を販売するなど地産地消の動きが広がりはじめています。

最後に「今年はこの12年を総括して次へステップする重要な年」と香坂さん。今後は、国に頼らない活動が増え、多くの人が楽しく活動継続できる工夫や、地域の中小企業を巻き込んで経済と環境を両立する取り組みなどが大切になってきます。次世代に社会の仕組みや環境をどう引き継ぐか、私たち一人ひとりの行動がカギとなりそうです。

※講演の様子はなごや生きものライブラリーで視聴いただけます（URLは最終面参照）。



なごや生物多様性保全活動協議会

なごや生きもの報告会を開催します

なごや生物多様性保全活動協議会の活動報告会を開催します。令和3年度の調査等で得られた情報をもとに、最新のなごやの生きものについてお伝えします。申込方法は下記ウェブサイトに掲載されています。ぜひお申し込みください！

日時 令和4年5月8日（日） 午後1時から4時45分

会場 名古屋市立大学 桜山キャンパス さくら講堂

定員 200名（抽選）

※新型コロナウイルス感染状況により、開催方法が変更又は中止となる場合があります。最新情報は協議会ウェブサイト（<http://www.bdnagoya.jp/>）をご覧ください。



祝

10周年記念誌を発行しました



センター・協議会の10周年記念誌『10年のあゆみ』は、『なごや生きものライブラリー』からご覧いただけます！



第3部では、これまでの活動や講演内容から、今後について語り合いました。



参加者

- ・なごや生物多様性保全活動協議会幹事
- ・東邦高校科学研究部
- ・名城大学附属高校自然科学部
- ・五箇 公一さん、香坂 玲さん
- ・なごや生物多様性センター



皆さんは講演からどんなことを感じましたか？

生きものの採集・生態調査で終わらず、そこから自分の生活や生態系を守っていくことに繋がりたいです。

世界中のいろんな地域で自然を守る小さな活動が行われている。だから地球の自然が守れていることを再認識できました。



一見、自然が乏しく思える名古屋にも貴重な生きものはいるのでしょうか。

ヤマトサンショウウオやナゴヤダルマガエルなど、都会の中にいるのはとても象徴的で自慢できることです。



ニホンイシガメは減少が著しい。ぜひ名古屋で保全のノウハウを確立して世の中に広めてほしい。



流域圏での保全で何か事例はありますか？



森林環境譲与税を活用した取り組みがあります。都市部では環境学習や支援活動が主ですが、秩父市と豊島区では連携して森林整備を行うなど、地域と都市が結びついているパターンもあります。

この譲与税は、都市部の人たちこそ学ばなければと今まさに学んでいるところです！



猪高緑地では、危険木の伐採に使わせていただきました。ここから、ため池の保水力などに繋げていければと思います。



学生や企業、自治体、学校など、より強く連携していくにはどうしたら良いでしょうか。

まず若者たちは、これまで保全活動されてきた方々の想いを知って、それを後世へ繋いでいけると感じます。

自然の面白さはその中に入ってこそ分かる。自然の側まで連れて行くことが我々に課せられた責任ですし、その拠点としてセンターにも機能してもらえたら。



我々の時代、自然はとってもタフでおもちゃのようだった。だからその楽しさを知ることができた。意識を向けてもらうには、生きもの好き以外の広い視点とニューノーマルな考えで、環境と紐づける何かがあるといい。それが、社会の進歩や発展、多様性社会に繋がると信じています。



チャットからの質問

里山再生はいま、非常に困難な状態ということですが、里山以外の方法で生物との棲み分けはあるのでしょうか？

里山再生といっても、昔のように戻すのではなく、IT農業など快適で新しいものにするを考えていく方がいい。自然の恵みを利用しながら、地方に人が住んで管理できる社会を作る、距離をとる空間、バランスを考えて節度を持つこと。そうした発想で里山再生をしていければいいと思います。

標本室を整備しました！

これまでセンターには、様々な生きものが収容・標本化され、収蔵されてきました。現在の標本点数は、18,780点にのぼります（2021年9月1日現在）。標本の種類や数が増えるにつれて、これらを収めておくためのスペースが不足してきたことから、10周年を機に新たに標本室を整備し、標本を分類群や種類ごとに整理し直しました。今回整備した3つの標本室について紹介します。

動物標本室

これまで倉庫として使用していた部屋を、哺乳類や昆虫類などの「乾燥標本」を収蔵するための標本室に改装しました。ここには、哺乳類の毛皮標本・骨格標本や昆虫標本などを収蔵しました。標本室の入り口には、防虫・防塵のための前室も設置しました。



改装中



改装後（矢印が前室）



かりはくせい
アライグマの仮剥製標本



昆虫標本

植物標本室

以前からあった維管束植物の「^{さくよう}腊葉標本」を収蔵する標本室に、標本棚を追加して、収蔵容量の大幅アップを図りました。センターで最も収蔵点数が多い植物標本に対応するためです。



標本棚の搬入



一時移動した
植物標本



腊葉標本

液浸標本室

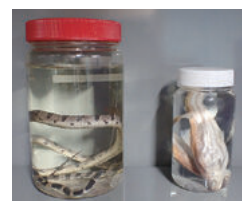
これまで哺乳類の毛皮標本を収蔵していた部屋を、「液浸標本」を収蔵するための標本室に改装しました。以前は別々の部屋で管理されていた様々な分類群（クモ類、甲殻類、魚類、両生類、爬虫類、哺乳類など）の液浸標本を、集約して収蔵できるようになりました。



整理前の液浸標本



液浸標本の整理の様子



シロマダラ（左）と
アユ（右）の液浸標本

（生物多様性専門員：曾根啓子）

すり鉢池で池干しを実施しました

11月14日に猪高緑地のすり鉢池（名東区）で池干し調査を実施しました。これは、保全を行う名東自然倶楽部や地元学区と計画し、地域の小学生に参加を呼びかけ実施したものです（写真1）。

参加者の網の中からは、モツゴやスジエビ（共に在来種）が多く見られたことから、生態系の上位にいる鳥やカメ等の生きものたちを育むための、とても良い環境が残されていることが分かりました。

しかし、誰かが放してしまったと思われる外来種のブルーギル（写真2）は、在来種の合計を上回る数が捕獲され、当日発表した時にはどよめきが走りました。

また、同じく外来種のウシガエルやアメリカザリガニ（写真3）も定着していることが分かりました。このことは特に在来種のニホンアカガエル（写真4）にとって、卵や幼体などが食べられてしまうため、生息環境の悪化に繋がります。

今回の池干し調査では捕獲されませんでしたでしたが、普段は森の中で暮らしているニホンアカガエルも、産卵の時期になると水辺を求めてこの池に集まります。子孫を残すために必要な水辺環境を失ってしまうと、在来種にとって死活問題となります。

今後も、池とその周辺環境の調査及び保全活動を続けることが大切です。

（生物多様性市民協働推進員：宇地原永吉）



写真1 池干しの様子



写真2 ブルーギル



写真3 アメリカザリガニ



写真4 ニホンアカガエル（亜成体）

表1 池干し捕獲結果

グループ	種 名	個体数
両生類	ウシガエル	292
	ミナミメダカ	129
魚 類	モツゴ	1238
	フナ類	109
	コイ（飼育型）	15
	メダカ（改良品種）	2
	ナマズ	1
	ブルーギル	3386
	カワリヌマエビ属の一種	76
甲殻類	スジエビ	1244
	アメリカザリガニ	320
昆虫類	オオヤマトンボ（幼生）	3

青：在来種 赤：外来種

掲示板

機関誌「なごやの生物多様性」 第9巻を発行しました

なごや生物多様性センターでは、地域で実践されている調査・保全活動等で得られたなごやの生物多様性に関する情報を、正確に記録し広く発信するため機関誌を発行しています。

第9巻では、総説をはじめ、学校や企業における取り組みの紹介など、17報が掲載されています。ぜひご覧ください。

機関誌は名古屋市公式ウェブサイトや名古屋市立図書館でご覧いただけます。

第10巻 投稿募集

投稿期限
2022年8月31日

2022年度に発行予定の第10巻の投稿を募集します。生物多様性に関わる活動を行っている市民、保全団体、専門家、学校、企業の方などどなたでも投稿できます。

第9巻より、学校や企業の取り組みなども対象とすることとし、より幅広い分野からの投稿ができるようになりました。

皆さまからの投稿をお待ちしています。

問い合わせ・申し込み先

発行：名古屋市環境局なごや生物多様性センター

住所 〒468-0066 名古屋市天白区元八事五丁目230番地

電話 052-831-8104(平日 8:45～17:30) FAX 052-839-1695

E-mail bdnagoya@kankyokyoku.city.nagoya.lg.jp

なごや生きものライブラリー

なごや生きものライブラリー 検索

<https://ikimono.city.nagoya.jp/>



名古屋市公式ウェブサイト

<https://www.city.nagoya.jp/>

なごや生物多様性保全活動協議会

<http://www.bdnagoya.jp/>

地下鉄塩釜口駅
2番または3番出口から
徒歩5分



生きものシンフォニーのバックナンバーは、なごや生物多様性センターのウェブサイト「なごや生きものライブラリー」でご覧いただけます。